

大嘗祭奉拜の記

京都特派員

▲實に神々しきよ  
大隈首相謹話

抑も大嘗祭の御儀式と申せば、様なくも、至尊御親ら、皇祖皇宗の神靈に  
神遊新酒を捧げようといふも、大切に申し奉る。崇祭なる御祭典にしあれば余は  
蒙承沐浴の上十四日午後六時三十分と言ふに大御殿にて大宮御所正門と  
參入り懸時、間置宮内なる控所に一時静けを持合せ居ながら觀式時節  
の案内にて御祭場左の御舎に入り、聖上の出御を待ち奉りし程に、正入御  
殿下には獨立に御出あり、御次第當に據つて順序に崇祭なる御儀式を奏  
げさせ給ふ。午後九時孝出度く御祭典を言らせ給うた。  
申すも此き事ながら、常夜の御儀式の神々しさは言の葉に盡し難く、宛然太  
古神代に立返りたるの御あり華嚴莊嚴なる、若くは震耀上の御御位に比して  
すに、だに幽遠なる御所内に、御靈氣として遊舞く宵月天にかへれる半夜  
には行はせられたる御事として、大正の大御代の如き感無かりし程神々しく拜  
奉つた。

▲其儀天上の如し  
波多野宮相謹話

大嘗祭に列なつて何を考へたかといへば只悦として何が何やら陳腐に分ちて眺めし神祇の氣に打たれた古來大嘗祭の臨しい御儀式といふことは書物で知り人にも聞いたが今風の常例となつて見るに乞に成る程と思はるゝ斷が澤山にある御殿の構造は固より神を捧げる思も又仕へ奉る思も凡て太古の風その儘をうつして執り行ふのである古人は大嘗祭は其の儘われ／＼をして神武の古に返へらしむのである  
 天上の如しといつたのは即ち此等の意味を語つたもので、奥に大嘗宮に列なつて高天原にある標々心地になり、古代生活の實景簡朴の有様を十二分に味ふことの出来た昨夜は稍々寒かつたが雨もなく風もなく夜を徹して歸かであつて大嘗宮の神祇は一層其々をして感深せしめられたれから大嘗に参り伊弉諾宮の御神武天皇始め先兩四代(山陵御親壽等)も行はるゝが先づ昨日で大役が済んだことも申すべきで安神の胸をなでて居る様なり  
 朝だ十五日

▲神代の如き静寂  
芳川顯正伯謹

大嘗祭は御代一度の最も重き御祀りであるから其御式の森厳莊重を備へてしめし申す迄もなきことであるが親しく御式を拜すると一入無有きを感じ奉る御式が始まるころ朝舎の燈火は悉く消され神籬の内なる御燈火の明かに見えて仄白く神籬を照し萬籟響絶えて神樂歌の音遙かに細く長く聞えこの四邊は森として神渡り渡る神籬の内に何事の在しますかは知られねど神代ながらの光輝は神の在りが如き心地せられて良しきは何んぞ榮ゆる中様なき程である神門の節の方に居る典籬官の持つて居る赤い燈火が動くのを合圖に饗合に居る典籬官が小さい聲にて「御立座」「御着座」と指揮するのに応じて一同か度度も起ちまた坐りする外は小さい人聲一つせしに懸静なものであつた夜が漸次更け渡るを吾々老臣は固よりとの若し人々迄も夜更に述べ兼ねて取ひ上る程であつた天皇陛下に於かせられては此寒き夜に潔斎あらせられ國平かに民安かれと親しく天祖及び天神地祇を祀せられし大御心の良きには唯々威位の外はない十一時叩門に悠々殿の御祀りを済ませられ参列員一同は先づ朝集所へ退下して夜食の賜はり夜半よりまた同じ様に主基殿の曉の御休降が行はせられたの

▲**奇<sup>キ</sup>瑞<sup>ザム</sup>的<sup>テキ</sup>の天<sup>テン</sup>候<sup>コウ</sup>**

尾崎法相謹話

▲ 婆娑たる月下の神域

土帝 堯 舜 禹 湯 四王 四人

大嘗祭參列の爲め旅館(大津屋)を立出づる寺内總督

つゝあるの一事なり十三日午後伏

大興中の政界

圖に現はるべくもあらざるを以て

# ◎帝政延期重要會議

最便宜價額金九百六十圓也  
石地上二建設  
木造瓦葺平家建本家一棟

歐洲大戰亂

最低競賣價額金百十九圓也  
右地上二建設  
木造瓦葺平家建本家一棟

獨帝土都に會せんとす

右號寶期日ハ大正四年十一月廿四日  
午前十時トス

茶代廢止席料なし  
東京市芝區愛宕町二丁目

品質第一

公  
告

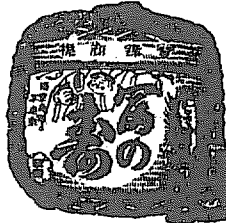
京城地方法院

[illegible]

名譽ある一等賞金牌受領



發賣元  
首藤京城支店



發賣元  
富安京城支店



元 賣 發

店 酒 莊 本

大藏省醸造協會主催  
第五回全國酒類  
品評會に於て







る事ことがありましたが、そよさよく

音がしたかと思ふ小忌の帳舎にお  
せらるゝ、各皇族方の御束帯のす  
れの音が聞え、條紀姫の御前なる御明  
燈の光りが神の御心のゆらめくが如  
くなるのが拜せられ、養蚕の上をしづ  
くと渡らせらるゝ玉歩の響  
きが神々しく聞えてお  
ました。(京都神祇員)

各地方に於ける  
盛なる奉祝餘興

地方に於ける奉祝餘興

思ひたる事と  
 前日來の装束に逢つた

大袈裟であつた。到る處で暗木を博し、  
なが惜しい事に、此の行状も途中で  
前に達つた。

▲牧の島

牧の島に渡れば、渡船指す所所前には、  
二十餘名の鯨人隊が異様の衣装に、  
老と言はず、幼と言はず、鉦大鼓などなを  
ひたひた、口々に、口々に、口々に、口々に、

出<sup>で</sup>した屋<sup>や</sup>臺<sup>だい</sup>を  
 町<sup>まち</sup>民<sup>みん</sup>が  
 尾<sup>お</sup>上<sup>のう</sup>の松<sup>まつ</sup>に  
 高<sup>たか</sup>砂<sup>さ</sup>の飾<sup>かざり</sup>  
 島<sup>しま</sup>奉<sup>ほう</sup>祝<sup>しゆ</sup>事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>所<sup>しよ</sup>前<sup>まへ</sup>より  
 青<sup>あお</sup>年<sup>ねん</sup>

なしては徒興の誤傳と共に私意に拘  
礙して美觀營へんに物かかりし牧の  
爲奉祀事務所前より青井會館及び  
町民が屋上の松に落砂の青井山車  
降り出しこれに管女に扮せしめたる  
藝妓十二名を乗せて鐙鞍にて驅さ  
れたるが道路は見物の爲めに全く  
かき足り歩行に能はず少時は身動  
み出まざりし程に賑ひを呈したり是れ

**釜山編**

狹隘なる街は人の波に押し  
一時は仲々に雑沓を來した

破天竺の船しに全市の耳目を驚かす  
 んど暗中に飛躍を試み居た釜山鎮  
 は流石に珍趣も妙着想に當日唯一の  
 班名を綴り忝にしたりき殊に第

松釜山府尹の府内官民招待奉印

松山府尹の府内官民招待奉、祝  
は既年の如く十六日午後二時より  
頭山に於て盛興にて盛大に開催せら  
れり當日正午より會場の受付を開  
けし處は、句書と千鶴菊の花にて  
飾られし。紅白の襷着たり廻  
りたる正門より、紅白の襷着たり廻  
りたる正面壇上には紅葉黄交りたる菊  
花の瓮を置き純白の布を被つたる卓  
子を置きたる。第一として非常の喝采を  
博したり西町の假装に係る諸曲高砂  
舞の藝十數名にて來り参んば其後  
は櫻枝なり犬猿赤鬼青鬼と意匠  
を凝したるもの五丁目の御大禮に參  
列する外國使臣に假装したる一團は  
頗る奇麗なるものに蓋し意匠に於  
ては當日の第一として非常の喝采を  
博したり西町の假装に係る諸曲高砂

松府君松府君上上に立ちて御即位の大典  
奉祝し、聖壽無疆を祈り、聖恩の  
大なる奉頌し、聞宴を宣して下る

府府に上に立ちて御即位の大典を奉祀し、聖壽無疆を祈り、聖恩の宏大なるを奉賀し開宴を宜しして下る次に郷津柳村の官民を代表して宴辭を述べ宴に終り宴辭にして府尹の發給に陛下の高威を三唱し宴を撤し、城下の萬歳せらる。城下店は朝明山と横擬店開始せらる。城下店は朝明山の内腹の全部に亘りて彼處此處に開

外各町の團體及び個人の假裝皆奉祀の趣旨を表示したるものゝみ也。何れを經り、皆村長より賞つたものを佩其せられ、各自萬歳を連唱しつゝ引揚げられは電光たる年なりき又常日鯨人個には相續豐年躍り響りて閉せり。人出も多く、市中は白衣黒衣假裝の人を以て埋まん計なりき

朝敵雲に隠れて雨と疑はれし十六  
 御大典日和となりて一天雲なき

十六日の公州  
 朝鮮雲に隠れて雨と疑はれし十六日  
 も御大典日和となりて一雲なき天  
 庭からかに瑞氣公州の天地に湛る道  
 廟門の大入りには大旗を以て交交し  
 奉祝の額を掲げ萬民を誘て門外  
 庭内に飾り木社支局前には旭則に因  
 る大絳門には奉祝の大提灯を立て  
 しく琵琶を弾じつゝ大絳に絃調を  
 面白く君萬歳を壽ぎつゝ唄などして  
 市中を練廻りしは閑しき催しなりき  
 呼物の芝居 未だ電燈の點  
 かざる夕暮より小唄の聲は芝居け  
 きの盛況にて小唄人氣の發けん言  
 夜の奉祝除興は全く満占の感あり  
 月餘に渉る練習の甲斐ありて各々

店頭を裝飾し幔幕を張り業を休む  
櫨、黄金の樹を植ゑ、其他各町種  
前には大縁門建立しあるに兩側に  
の手にある假裝兵士あり、農工

手に成る肥後兵士あり、農工銀行  
 前には大郷町建立しあるに兩側には  
 黄金の街を袖ふ、其他各町種々  
 店頭を裝飾し燈幕を張るを休む  
 十時より公州料理屋組合の催に係  
 屋敷嬢子には各料理店の藝妓奴  
 子屋敷に現はれ一舞櫻、湖月の主人  
 高砂夫婦に模倣各處にて躍る、常駐  
 顔の如く郡山に於ける街角典奉  
 戲は十五日開始せられ各町に  
 數日來餘日の趣向を練り寄りゝ郡  
 議準備中なりしが同日一度に密客  
 益は開放せられ雲に東家町の仁増加  
 屋敷西榮町の有名人物假裝行列公州  
 通り公家行列四條通りの屋敷三陽  
 通り公家屋敷は五丁扮装藝妓夜に  
 意匠を凝し全市街を練り過る

し等ありたり 因に本社支局に於て  
右の行列入對して酒、煙草等の寄  
を爲したり

慶應義行須 自轉車便裝行列、實探  
 右等たり、因に本社支局に於ては  
 しの行列に對して酒、煙草等の寄贈  
 を爲したり

▲清州奉祝餘興  
 奉祝餘興十五日は午後一時より假宴  
 行列開始せられぬ數日來秘密中に準  
 び、意りなかりし暇にて集ま

時三十分第一號報一發集合と報する  
 や、廣底集合地小學校前運動場には市  
 民の行列に參加する者華々しく詰めか  
 り、銀行會社各商店各新聞社支店は章  
 匠萬燈を押して續々と參集し午後七  
 時萬燈を發天に轟く行列、進行開始  
 時を報するや本社支局旗高張提燈點  
 隊を先頭に本社支局はの趣向に成る

外に、萬夜は水道課の忠臣蔵義士の  
列九條通り武士行列特に電氣會社

外に黄後は水道橋の忠臣蔵義士の  
 列九條通り武士行列特に電氣會社  
 連行行列は本社支店大連摩萬燈の  
 驅となり對照珍奇を極めたり

本椿香油

大 純本

宮妃殿下及宮内省御内儀  
用之光榮を辱せり  
九條公卿家始其他華族貴顯方御常  
の榮を蒙れり

皇宮に  
 皇宮内儀  
 下及宮内省  
 御内儀  
 用之元來を降せり  
 九條公家始其  
 他華族貴顯方御  
 常の榮を蒙り  
 目博覽  
 金銀牌  
 領  
 注意 二婦人共頭上桶をきは過物  
 定置 廿錢、卅錢、六十錢、一圓  
 髪を黒く長くつや光せし

給ふ意の賜<sup>イミ</sup>式<sup>シキ</sup>は十六日正午<sup>シユウノチ</sup>御<sup>ミ</sup>

即位の後大嘗祭に於て天祖天神地神に神酒神穀を清献せられ降下御聞し召されし後臣下にも御給ふ意の賜儀式は十六日正午南道處に於て行はせらる。此日濱に於ては道盛正命を式期に當てて團圓杜等惡く紅白の棧盤を張り火に垂香惡く紅白の棧盤を張り宮の前方より香煙を以て

天皇陛下萬歳を三唱し宣  
 旨を合唱し 天長開會を宣し君カ侍  
 移る當日は各賜候者は白酒、黒酒

の公卿・學田・傳三郎氏、燕岐郡古  
 七名の内名望家として饗を賜り、  
 威・士・飯・餉等の賜饗は白濁、黒  
 移る當日は各賜饗者は白酒、黒  
 合唱し、天皇陛下萬歳を三唱し、  
 理・法・合第一部長・開會を宣し、  
 警察署長及び里長等席し、長

▲ 賜饌拜戴式

▲賜饌拜戴式  
釜山に於ける  
釜山府に於ける賜饌拜戴式は既報  
如く十六日午前十時より釜山第一  
小學校内に於て樂行釜山府東萊  
釜山海濱山府山各府郡在住文武官

第四十七條

忠直公、大阪城は何時落城いたしましたか申セツ。丹一ハッ、元和元年五月七日が大坂合戦の落城して御坐いました。七日「ムツ」城にいたしたのは、誰の手から致して落城いたしました。丹一ハッ「何人の手から大阪城を破つたか」。御常家に於いて、今泰平の世の中に、あつて宜しき所へは、將軍家より御許しはあり。又五重の天守なくして宜しき所は御許しはなし、御覽あれ、御慶國金澤には五重の天守これなく、又その他のにも天守を置かざる所は、幾らも是もあり、然るに

第四十七番  
早川貞水口演

全く御家様、殿様の御功名で御  
ります。忠「コレ、然らば予が第一の

金く御當家様殿様の御功名で御坐築上げる、金が足らなければ、通用ります。忠コレ然らば子が第一の功の金を結立し、金を結立て、築く

9

であらう、  
其第一の功たる忠直（そのだい

であらう、其第一の功たる忠直對して、百萬石の代りとも馬形付の御茶器を下されたり、公議に斯かる御無理があるに依て、此忠直に於ても快かられわ。丹御道主様、一〇

足張同様の袴に相成られれば、承知ならぬ、子に仕へる某方、子の申す言に背き、背かねとあらば、無爲は指かれ、如何やん。どうも其御感歎、何としても御聞入れがない、



其方であるから、其事は出来よう  
 丹「ハ、ハツ、恐れながら申し上げ  
 天下泰平となつた今日、公機

竊く繪圖を摸じ丹<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>軍師の  
 其方であるから、其事は出来ようが  
 丹<sup>ハ</sup>、ハツ、恐れながら申し上げ奉  
 る、天下泰平となつた今日、公儀の  
 御許しなすに、御城中に五重の天守  
 を築きますれば、是れ諸叛の御志あ  
 りとして、公儀より御めあること  
 は必定で御坐います、此儀は思ひ止  
 り退がると、病氣と稱して御免を願  
 つた。そこで軍學者の清水筑後を召  
 して仰せ付けられる、是また天下の  
 御大患と思ふから、假令病氣と稱し  
 て御免を被さうとせん、忠<sup>ハ</sup>汝に於  
 ては子に意見をしようと云ふ志なら  
 ん、子の眼光に恐れをなし、病氣  
 と申し、子を詐はり、繪圖面繼張を



**十一月初九日**

萬曆十三年十一月三日甲寅  
本命一百北平不勝誠

此度は今村權瀨に申し付けれる、櫻部は仕方が無い。生命を冒してはないが御勘弁じました。

庭へ倒れる。此有様を見て、一同の上り最う誠言申し上げる者ない。此度は今村權瀨に申し付けれる、櫻部は仕方が無い。生命を冒してはないが御勘弁じました。

小領を急務する日事見合四方の各々一白く、小領を急務する日事見合四方の各々



















